

辺野古新基地に沖縄戦激戦地の土砂 採取計画は「死者冒瀆」 遺族の怒り県外でも

しんぶん赤旗 2021年8月25日【1・4面】

76年前、住民を巻き込む凄惨（せいさん）な地上戦が行われた沖縄戦。約20万人もの犠牲者の血が流されました。菅義偉政権は、名護市辺野古に米軍新基地を造るため、犠牲者の遺骨が地中に残る沖縄本島南部で、埋め立ての土砂を採取しようと計画。「死者を冒瀆（ぼうとく）する行為だ」と憤る声は県内だけでなく、全国にも広がり始めています。沖縄戦に動員され、戦死した日本軍将兵の遺族らにも共通する思いだからです。（岡素晴）

1993年2月下旬、童話作家の加藤多一さん（87）＝北海道小樽市＝は、沖縄本島南部の八重瀬町を走る軽トラックの助手席に揺られていました。郷里の厳しい寒さから一変し汗ばむ陽気。サトウキビの収穫に精を出す住民の姿がありました。

足跡たどる旅

沖縄で戦死した13歳年上の兄、輝一（こういち）さん（享年24）の足跡をたどる初めての旅でした。「私たちきょうだいはコウちゃんと呼び、大好きだった。気が優しくて力持ち。特に父母にとっても優しかった」。一家の大黒柱だった兄の死に、両親は起き上がれないほどの悲嘆に暮れました。

輝一さんは武器、食料などの輸送を担った輜重（しちょう）兵で馬部隊の所属でした。

この時、馬部隊ゆかりの場所として多一さんが案内されたのは、八重瀬町の世名城（よなぐすく）地区。馬の水くみ場とされる池がありました。「沖縄戦の生き残りだった地元女性によれば、馬部隊がこの水を馬に飲ませていたんだと」

輝一さんの足取りが残っているかもしれない場所でした。しかし、計7回にわたり沖縄を訪れたものの、それ以外の足跡は見つけれませんでした。兄がいつどこで最期を迎えたのか不明で、遺骨の所在も分かっていません。

その後、多一さんは自問を続けてきました。「自分は後回しにしても困っている友人を助けようとする。それぐらい誰に対しても優しくかった兄だが、日本軍による住民への加害に無関係でいられたらどうか」

沖縄戦では「強制集団死」（集団自決）など日本軍の加害によって多くの住民が犠牲になりました。「兄も住民を避難壕（ごう）から追い出すようなことをしたかもしれない。私の家族も兄を奪われ苦しんだが、沖縄の人々は米軍占領後も現在まで何百倍も苦しみ続けている。その歴史を踏みにじり、住民犠牲の土を埋め立てに使うなど到底、許すことはできない」

反戦平和こそ

新基地建設をはじめ軍事力の増強が「平和と安全」を口実にしていることを踏まえ、多一さんは訴えたいことがあります。「日本を戦争する国にしようとする者たちも平和という言葉を使います。平和の2文字ではなく反戦平和の4文字でなければ、戦争する論理に対峙（たいじ）できない」

「沖縄だけの問題ではない」 人道上許されぬ 意見書広がる

沖縄戦での日本側の犠牲者は推定18万8000人で、沖縄出身を除く日本軍将兵の戦死者は6万5908人。そのうち北海道出身が最も多く1万人以上にのぼります。遺骨が収容されても身元が判明するのはごくわずか。多くは遺族の元に戻らないままです。

北海道夕張市に住む松倉紀昭さん（84）も、歩兵第32連隊所属だった父の遺骨は返ってきていません。

今は亡き母が敗戦の翌年、夫の戦死を知らせてきた上官に手紙を出していたことを4年前に知りました。手紙を託された人たちが訪ねてきたからです。沖縄戦犠牲者の遺骨や遺品を収集し、遺族に届けて活動するボランティアの学生らでした。

手紙には、わが子のことを思えば許されないとしつつ、「本心では夫の後を追いたい」と記されていたといいます。母は苦労の中、ひとりで3児を育て上げ、戦争や父について多くを語らないまま51歳で亡くなりました。

病気で体が十分動けなくなった今でも、沖縄再訪の願いを明かす松倉さん。できることなら父の遺骨を見つけ、辛苦を重ねた母に報いたいと話します。「南部の土砂採掘場には、父の遺骨が一部でも埋まっているかもしれない。こんな非道は絶対にあってはならないことです」

若者よびかけ

遺骨を含む可能性がある南部の土砂を埋め立てに使わないよう国に求める意見書が、沖縄県内だけでなく全国の地方議会でも可決され始めています。奈良県議会、金沢・長野両市議会が6月定例会において全会一致で可決するなど、1県6市町に広がっています。

石川県珠洲市では、同市在住の坂本菜の花さん（22）が呼びかけ、市民有志で6月7日に国への意見書提出を求める請願書を市議会に提出。請願は継続審査となり、9月定例会で採決の見通しです。

高校3年間を那覇市のフリースクールで過ごした坂本さん。高1の時、遺骨収集に参加したことがあります。今回、土砂採掘の中止を求めハンガーストライキを決行した具志堅隆松さん（沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」代表）に教わりながら、作業を手伝ったといいます。

永久に返せぬ

沖縄県は昨年3月末時点の推計で2825体の未収容遺骨が今も県内の地中に残っているとされています。「見つかるはずの遺骨が埋め立てに使われれば、永久に遺族の元に返せなくなってしまう。人道上、許されないことだと思いました」

今年の春、坂本さんら若い世代が中心となって具志堅さんのハンストに呼応する緊急ステートメント（声明）を発表。そのメンバーたちでオンライン座談会をするほか、できる活動を探る中で各自治体の議会に働きかけることにしました。

坂本さんは「党派や思想を抜きにすれば、ほとんどの人がおかしいと言うはず。なのに、まだそうなっていないのは、多くの人に知られていないからかもしれない。議会での働きかけだけでなく、柔軟に知らせる機会を増やすため動いていきたい」と語ります。

珠洲市議会の動きは、金沢市にも波及しました。請願方法をめぐり坂本さんは知り合いの金沢市議に相談。それをきっかけに社民党市議などをつくる会派「みらい金沢」で、同趣旨の意見書案を議会提出しようとして検討が始まったといいます。

他方、日本共産党金沢市議団も珠洲市議会の請願書提出を報じた地元紙の記事に注目。森尾嘉昭団長は「共産党議員がない珠洲市がやるなら、金沢でもやらなければと思った」と話します。

「みらい」と党市議団は、それぞれ検討した意見書案を一本化し、共同提案することに。6月21日、自民党などの賛同も得て全会一致で可決されました。

森尾団長は、全ての沖縄戦犠牲者の追悼碑「平和の礎」（糸満市）には、石川県出身の1072人の名前も刻まれていると指摘。「沖縄だけでなく石川県の問題でもあり全国の問題です。意見書可決が全国に広がってほしい」と訴えます。